

聖霊がもたらす喜び

(ルカ1・39〜45)

一、マリアは急いで行った

39節をご覧ください。それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。とあります。それからとありますが、これまでの聖書は

そのころでした。すなわち、文語訳、口語訳、新改訳旧版、新改訳改訂第3版、新共同訳、フランススコム訳もそのころでした。一番新しい聖書協会共同訳もその頃です。元の聖書に「その頃」と書かれているからです。ですが、私たちが「そのころ」ということばを聞きますと、マリアがのんびりしていて、ようやく腰を上げて行動に移したというイメージを思い浮かべてしまいます。ところが39節の終わりに「急いで行った」と語られていますので、かなり急いでいた様子が伝わってまいります。どうやら「そのころ」は、ルカがよく使う表現のようでありまして、文字通りの意味ではないようです。そういう意味では、新改訳2017の「それから」は、よく考えられた訳語かと思われま

す。主の召しに應えてから間髪をいれずに出かけて行ったという意味ではありません。おそらくマリアが出発する前に、マタイの福音書1章に書かれている、婚約者のヨセフがマリアの妊娠を知って、ひそかに離縁しようと思

い、夢の内に主の使いが現れて、マリアとの婚約をそのままにしようとした決意した出来事があったはず

です。さて、今一度39節をご覧ください。

それから、マリアは立って、山地にあるユダの町に急いで行った。とあります。マリアはどこに行ったのでしょうか。ザカリヤとエリサベツ夫妻のところ

です。当時祭司はエルサレムの近郊には住まず、人里離れたところに住居を構えていたようです。山地にあるユダの町には、そのような意味があるようです。40節をご覧ください。そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。とあります。なぜマリアはエリサベツに会いに行ったのでしょうか。しかも急いで行ったとありますから、相当な意気込みであった推察

できます。理由として考えられるのは、御使いがマリアに語ったこと

ばです。36節、37節です。見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあ

なたの年になって男の子を宿しています。不妊と言われていた人なのに、今はもう

六か月です。神にとって不可能なことは何もありません。と語ったこと

ばです。す。マリアは十代の少女、エリサベツの年齢は分かりませんが、年をとって

いました(1・7)。当時は四十歳でも年寄りだったと思われ

ますから、四十代といったところでしょうか。マリアは、「エリサベツに奇跡が起こったなら、是非会いたい」と思

ったのでありま

す。もう一度40節をご覧ください。そしてザカリヤの家に行き、エリサベツ

にあいさつした。とあります。すると、何が起こった

のでしょうか。41節です。エリサベツがマリアのあいさつを聞いたとき、子が胎内で躍り、エリサベツ

は聖霊に満たされた。とあります。この時エリサベツは男の子を宿し、六

か月を越えていました。六か月を越えたら胎児は動くのでありま

す。エリサベツは神の御力によってザカリヤの子を宿し、マリアは聖霊によって、すな

わち神によって、神の子を宿した身

でした。その二人が出会って何かが起こるかは、おおよそ

予測できます。エリサベツは聖霊に満た

されました。すなわち、神の霊に満た

されました。前後関係を見るなら、この

時マリアも、信仰と喜びに満たされて

いました。47節を見ると、わが救い主なる神を喜びた

たえま。新改訳改訂第3版)。そういうわけで、マ

アがエリサベツにあいさつしたときに、聖霊による喜びに満たされたという状況が見えてまいります。マリアのあいさつを受けてエリサベツは聖霊に満たされ、感極まって語りました。42節より45節です。1・42〜45 私たちも経験的に分かるような気がいたします。エリサベツが宿した男の子ヨハネは「まだ母の胎にいるときから聖霊に満たされ」ていたからです(1・15)。

三、エリサベツ、マリアと私たち

今し方、44節の「あなたのあいさつ

の聲が私の耳に入った、ちょうどその

とき、私の胎内で子どもが喜んで躍

りました。は、経験的に分かるような気が

いたします、とお語りしました。実は、

この喜びを経験しているのが教会に属

する私たちなのだと思います。使徒パウロは「神の国は飲み食いのことでは

なく、義と平和と聖霊による喜びである」と語りました(ローマ14・17)。

教会にしかない喜びというものがあると思

います。「思います」と言いましたが、表現が弱いかも知

りません。ですが、敢えて控えめに「思

います」と語りました。エリサベツとマリアに臨

んだ聖霊による喜びは、主イエス・キリス

トを信じる私たちにも臨んでいます。教会に授けられて

いる、義と平和と聖霊による喜びを大切にしよう

ではありませんか。